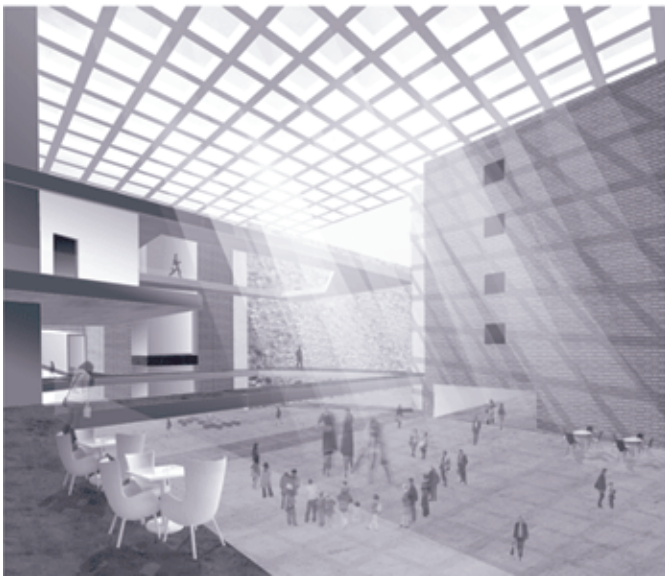
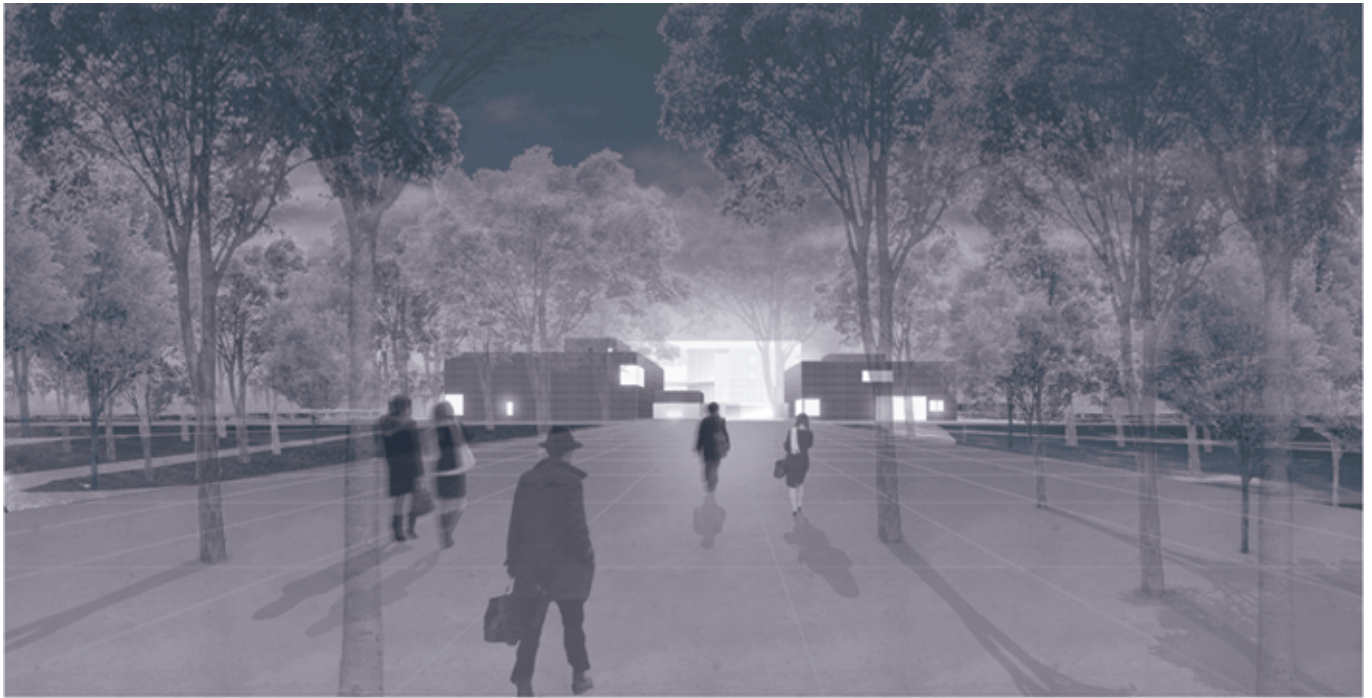




上野公園芸術文化フォーラム

- 東京都美術館を活用した芸術文化活動支援施設の設計 -

上野恩賜公園内に立地している前川國男によって設計された東京都美術館は、現在老朽化により、大規模改修することが決定している。また、他館との機能重複などから、美術館としての転換期を迎えており、新たな役割を考える必要がある。1960年代から日本における文化施設は急激に増加し、現在も常に新たな施設が生まれ続けている。一方で、経年劣化や時代の変化により機能低下を迎える施設も増加の一途をたどっている。今後、そういった文化施設建築への対応が求められることは必然である。機能低下した施設の建築的価値を見だし、保存、活用することで新たな時代に対応した建築へ転換する必要がある。また、公園には様々な文化施設が多数存在しており、芸術・文化の集合地域となっている。しかしそれらの施設はそれぞれが独立した単体として存在しており、同じ地域に集合しているという好条件を活かしているとは言えない状態にある。これらの施設群の関係を再構築することで、より魅力的な芸術文化活動の舞台となるのではないだろうか。

本計画では、東京都美術館を設計対象とし、既存の建築を活用し、市民のための芸術文化活動を支援する施設へと転用させた。また、上野公園内、及び周辺の文化施設同士をひとつの大きな施設としてとらえ、新しい上野独自の芸術文化地帯（上野公園芸術文化フォーラム）を形成するための公園のランドスケープデザインを提示した。新しく転用された東京都美術館は、周辺施設の機能を補完するとともに、上野公園芸術文化フォーラムの中の中核として、上野公園全体をより活性化させるものとなる。

1. 計画の背景

1-1. 上野公園の現状と可能性

公園内には美術博物館をはじめ、国内を代表するような数多くの歴史的建物や、様々な文化施設が点在している。さらに、整備の不足により公園内の各施設の周辺を樹木が覆い、視覚的にも動線を把握しにくい状況となっている。そのため至るところに施設の看板や案内が設置されており、景観の悪化を招いている。また、公園中心に位置する噴水広場付近には樹木に囲まれた未整備地帯が広がっていることから、噴水広場と周辺の施設との間に隔りが生じている。

1-2. 東京都美術館の現状と施設の主要機能の転出

東京都美術館は、平成 16 年度に東京都が実施した調査によると、建築設備をはじめ、各部の経年劣化が進行している。また東京都美術館は、昭和 50 年の開館を機に、収蔵作品を紹介する自主企画展や文化事業等にも着手したが、平成 7 年に東京都現代美術館が開館して収蔵品を移してからは、収蔵品を持たない貸しギャラリーとして独自の事業展開を行ってきた。平成 19 年 1 月、六本木に東京都美術館同様収蔵品を持たず、公募展に加えて報道機関等との共催展や自主企画展も行う国立新美術館がオープンし、これまで東京都美術館を利用してきた日展をはじめ主要な公募団体が会場を国立新美術館に移したことから、東京都美術館の役割が問われている。

1-3. 海外大型文化施設との比較

海外では、施設同士の連携によって芸術活動支援の場として広く利用され、多彩な活動を展開している大規模施設が多数存在している。一方日本ではひとつひとつの施設の規模が小さいものが多く、展示機能が主とされるため、市民の芸術活動の場が充実していないことがいえる。上野公園周辺の施設群も同様に、様々な普及活動が行われているものの、その活動のための場所が充実しているとは言えない状況である。

2. 計画の目的

2-1. 都美術館の新たな役割

都美術館は 1975 年に前川國男によって設計された建物である。当時の要求から、公募展示機能を主軸とし、また、公園とのつながりを意図された建築である。しかし、30 年以上が経過した現在、当時の目的であった公募展示や常設展示はすでに機能を失っている。そのことから、この施設に新たな役割を与える必要がある。公園の中心に立地している点、現在の美術館機能が低下している点から、都美術館に新しく周辺施設の不足機能を補完する役割へと転用させ、また、周辺施設全体の関係と機能を高めることを目的とする。

2-2. 既存建築の活用

当時の利用団体の要求から、公募展示室は一定の展示空間が 4 棟 3 層にわたる特殊な構成となっている。これらの余剰空間の新たな利用方法と機能転用を図る。また、耐久性を意識して使用された、タイルブロック打ち込みによる外壁仕上げや、地下 3 階にわたる地下空間、地上部分の分棟配置された各ボリュームは建物の特徴を構成する重要な要素である。これらの要素を継承しながら、現在に対応するように新たに再構築する。



fig.1 敷地写真



fig.2 敷地写真

2-3. 点在する施設を結びつける

上野公園内、及び周辺の文化施設同士の機能的つながりを生み出す。上野公園全体をひとつの大きな施設のようにとらえることで、上野独自の芸術文化地帯（上野公園芸術文化フォーラム）を形成する。

2-4. 公園内の動線整備

公園内の施設同士のつながりをもたせ、回遊性を持った新たな公園の動線を再設定する。また、環境の悪化を招いている未整備地帯を整備し、公園の環境、景観の向上を図る。

3. 計画敷地



4. プログラム

4-1. 周辺施設補完機能

周辺施設のプログラムを分析し、機能面積の不足状況からプログラムの抽出を行う。結果以下の 3 つが挙げられる。

- 創作活動
- 学習・教育活動
- 研究活動

◎ 分析対象施設

- ・ 国立西洋美術館
- ・ 国立科学博物館
- ・ 東京国立博物館
- ・ 東京文化会館
- ・ 上野動物園
- ・ 上野の森美術館
- ・ 東京芸術大学
- ・ 東京芸術大学美術館
- ・ 国際こども図書館

以上からプログラムを選定する。

- 創作活動機能
 - ・ ワークショップ
 - ・ ホール（講演／シンポジウム／舞台公演／映像上映）
 - ・ 舞台芸術スタジオ、音楽スタジオ
 - ・ アトリエ（個人貸アトリエ、共有アトリエ）
 - ・ ギャラリー
 - ・ ボランティアスタッフルーム
- 学習・教育機能
 - ・ 学習スペース
 - ・ レクチャー（研修／セミナー）ルーム
 - ・ アートスクール
- 研究機能
 - ・ 研究資料保管を兼ねた芸術・文化専門図書機能
 - ・ 研究作業室、会議室
- サービス機能
 - ・ ミュージアムショップ／ブックショップ
 - ・ アートショップ、アートサロン
 - ・ レストラン
 - ・ カフェ
- 事務・管理機能
 - ・ 事務室、機械室、電気室、倉庫等

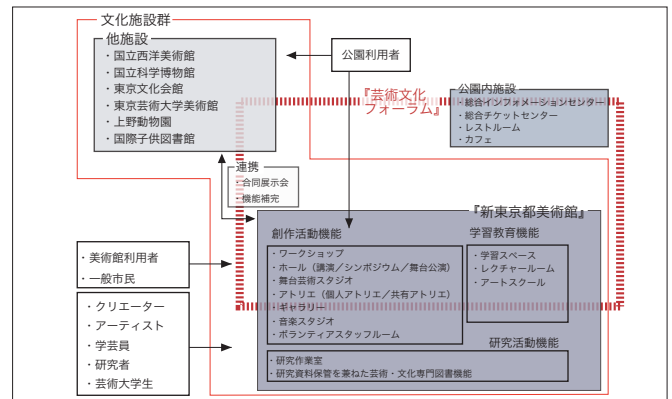


fig.3 プログラムダイアグラム

5. 設計概要

5-1. 既存建築の分析

まず既存の建物の建築的特徴を抽出する。

- ・規模が大きく、分棟である。
- ・既存機能によって各棟の建築構成が異なる。(規模、階高等)
- ・各棟をつなぐ地下1階、各棟への動線が複雑である。
- ・エントランスが不明快。

5-2. 建築の分割

建物を建築的特徴ごとに分割する。

- ・公募展示棟 企画展示棟 教育文化棟
- ・事務管理棟 地下彫塑室 エスプラナード

5-3. ボリュームの調整

公募展示棟の4棟3層のひとつの大きなボリュームのうちの棟分を取り除き、2つのボリュームにすることで建築の規模を調整する。

6-4. 十字アプローチ

各ボリュームの間の4方向からそれぞれ特徴をもった外部空間を介して建物の中心へアプローチする構成とし、エントランスを明快にする。

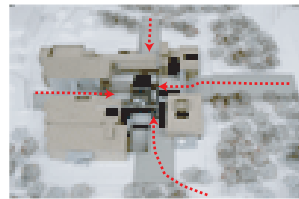


fig.4 十字アプローチ

5-5. 縦動線コア

建物の中心に挿入し、各棟の不均一な階高に合わせてスラブを決定し、各棟へとパスをつなぐ。また、様々な活動スペース、各棟の補完機能を内包しながら立体的な動線を生み出す。

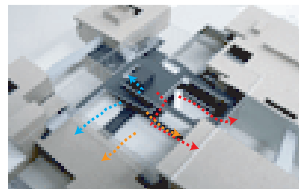


fig.5 縦動線コア

5-6. 内外空間の反転

屋根によって外部空間であった建物の中心に大きな内部空間をつくり、すべての棟をつなぐ。さらに、公募展示棟の一棟と地下彫塑室の屋根をとり、内部空間から外部へと反転させる。これにより、既存の空間に劇的な変化をもたらす。

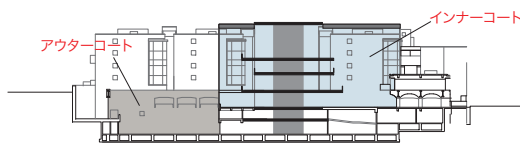


fig.6 内外の反転

5-10. 公園全体に及ぶランドスケープ計画

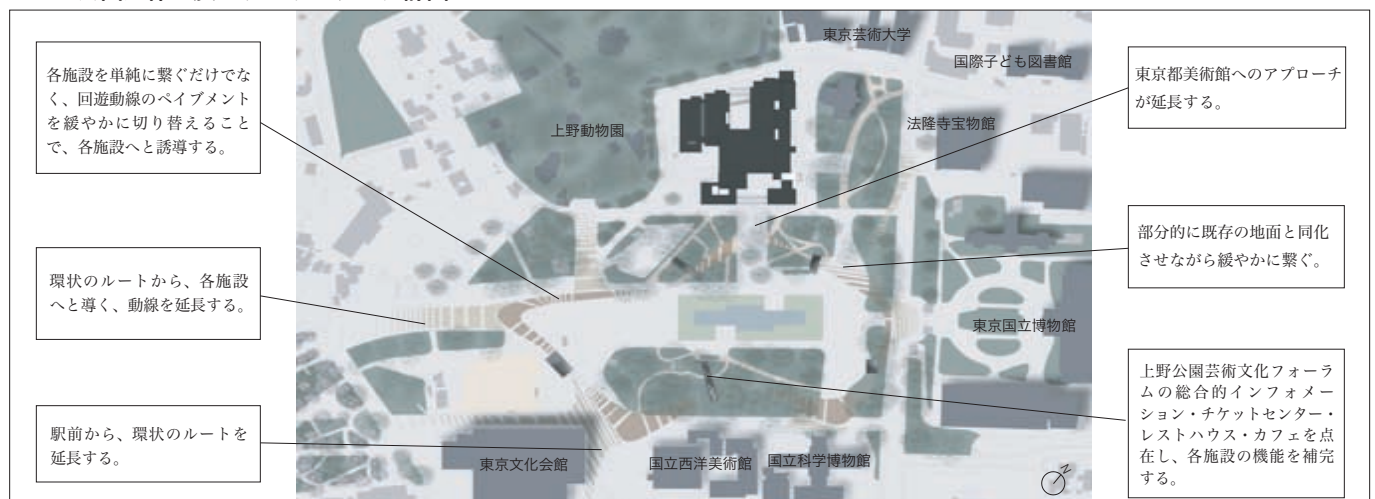


fig.10 ランドスケープ計画

5-7. プログラムの配置

以上の操作によってできた様々なボリューム、空間に新たなプログラムを配置する。

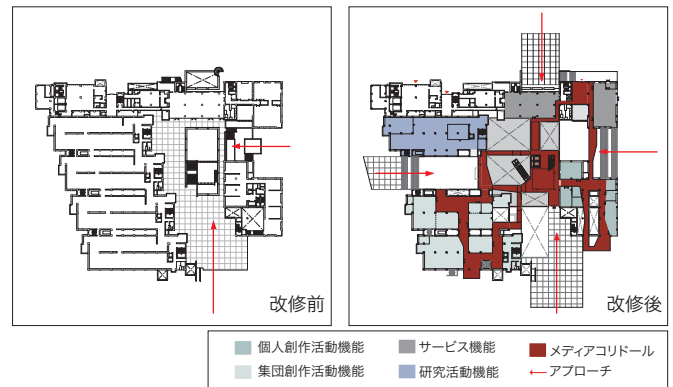


fig.7 プログラム配置

5-8. メディアコリドール

既存になかった平面的な回遊性をもたせながら、様々な活動の情報機能と展示機能をもち、既存の単一な空間から変化に富んだ空間へ変え、各機能へとつなぐ。

コリドール内で様々な開口によって、上下左右に視線が抜け、様々な活動シーンが展開される。また、コリドールの高さによって隣り合う機能の領域を分けながら声や音などの気配が感じられる状態を発生させ、さらには外部空間をも取り込む新たな空間の仕切りとして提案する。同時に、サービス動線や倉庫等を立体的に処理する性質をもたせている。

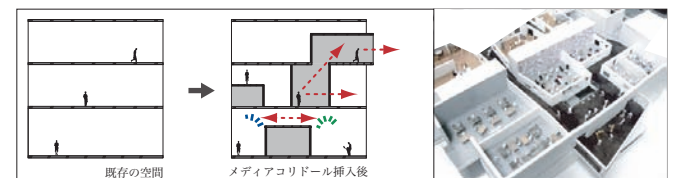


fig.8 メディアコリドール

5-9. 構造計画・設備計画

インナーコート上部の屋根は既存の躯体との接合部分によって水平力を吸収し、新しく挿入したコアと既存の躯体によって支持する構造とする。また、縦動線コアはインナーコート上部にたまった空気を換気する設備装置としても機能する。

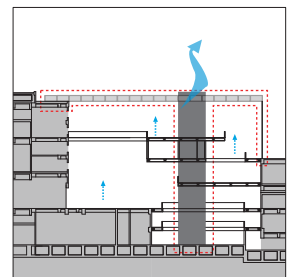
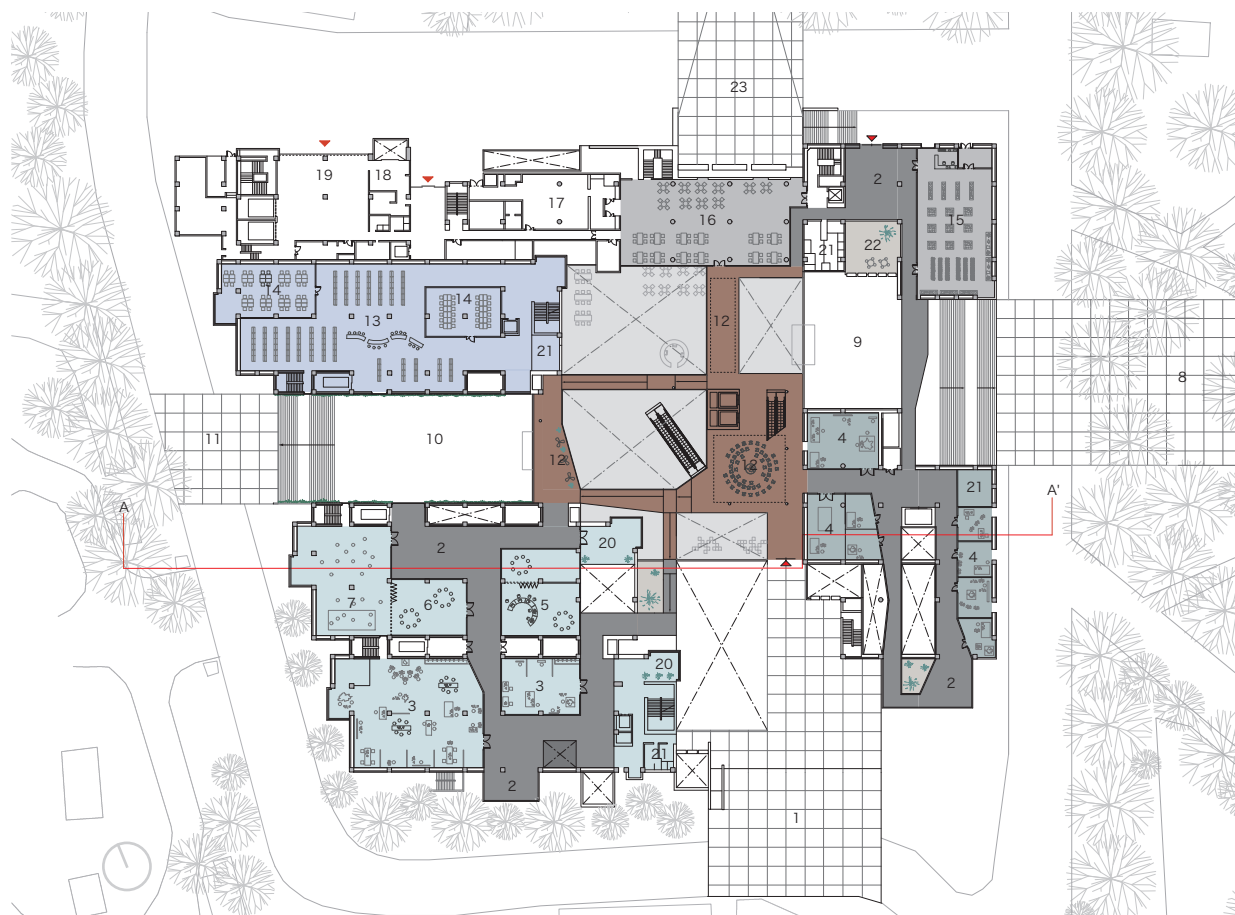
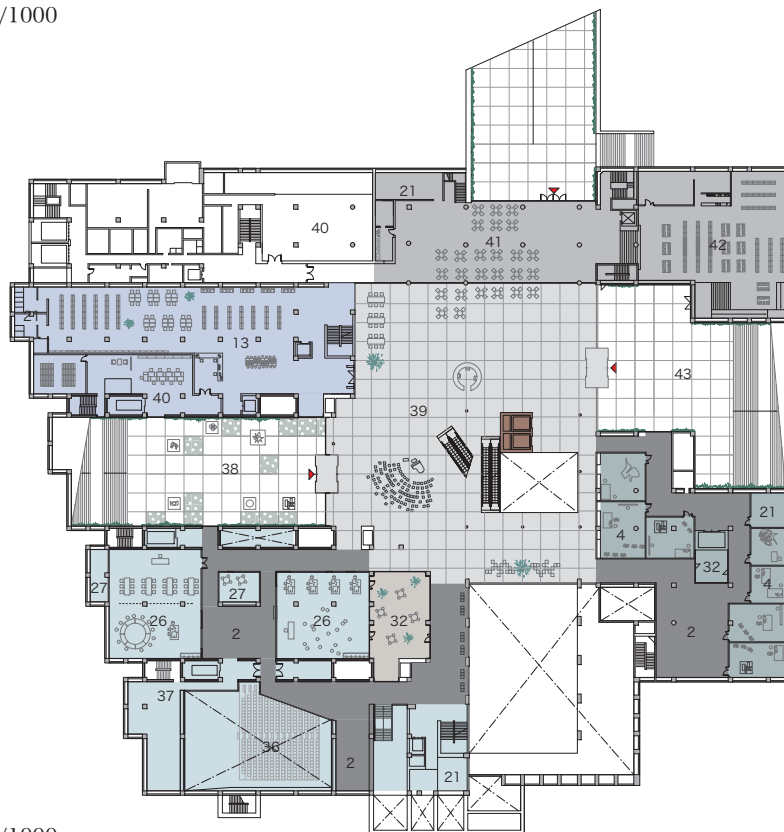


fig.9 構造・設備計画



1F PLAN 1/1000

- 1 既存エスプラナード
- 2 ギャラリー
- 3 共有アトリエ
- 4 個人貸アトリエ
- 5 音楽スタジオ
- 6 ダンススタジオ
- 7 舞台芸術スタジオ
- 8 東側アプローチ
- 9 エントランスプラザ上部
- 10 スカルプチャーコート上部
- 11 西側アプローチ
- 12 アクティビティスペース
- 13 図書室
- 14 学習室
- 15 ブックショップ
- 16 レストラン
- 17 厨房
- 18 管理室
- 19 搬入出口
- 20 ラウンジ
- 21 トイレ
- 22 テラス
- 23 北側アプローチ
- 24 レクチャールーム
- 25 アートスクール
- 26 ワークショップ
- 27 スタッフルーム
- 28 サービス動線
- 29 研究作業室
- 30 搬出入経路
- 31 空調機械室
- 32 光庭
- 33 荷受
- 34 作品保管庫
- 35 アウターコート
- 36 オーディトリウム上部
- 37 キャットウォーク
- 38 スカルプチャーコート
- 39 インナーコート
- 40 事務室
- 41 カフェテリア
- 42 ミュージアムショップ
- 43 エントランスプラザ

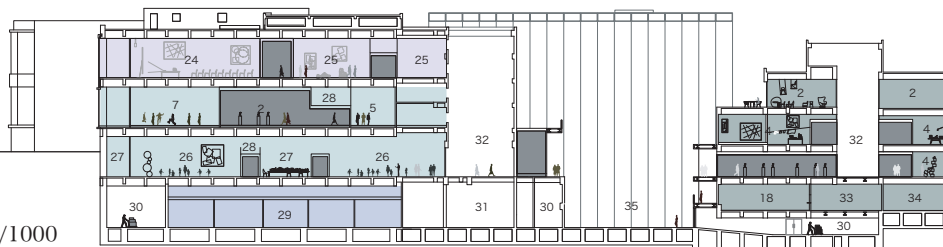


B1 PLAN 1/1000

- 個人創作活動機能
- 集団創作活動機能
- サービス機能
- 研究活動機能
- 教育学習機能
- メディアコリドール
- 縦動線コア
- インナーコート

建築概要

構造規模:鉄骨造
 地下3階、地上2階、塔屋1階
 敷地面積:16,060.00㎡
 建築面積:6,755.94㎡
 延床面積:35,104.7㎡
 増・改築部延床面積:14,674.39㎡
 建蔽率:42.06%(許容60%)
 容積率:218.58%(許容300%)



AA' SECTION 1/1000